


 還暦会員からの
 お便り

半生を顧みて

～今を決めた道しるべと雑感～

森田 一樹*

まてりあ60巻記念企画として先月(10号)に日本金属学会関東支部の活動について紹介させていただいたところですが、このたび同企画で、還暦を迎えた会員として寄稿の依頼をいただきました。小職はまてりあ(日本金属学会会報)よりもやや老けており、ちょうど1年前(11号発行日)に還暦を迎えております。鉄やシリコンを中心とした金属製精錬に関わる高温物理化学を専門とし、当学会および日本鉄鋼協会を軸に活動をしています。本誌面を私的な随想に割くのは些か恐縮ですが、格好よくない自身の半生について振り返り、思うところを少しだけ述べさせていただきます。

最近、親ガチャという言葉を目にしますが、好むと好まざるとにかかわらず自身は二代目で、見事に親の洗脳を受けて現在に至っています。思い返せば1969年、小学3年生の夏休みに父の職場(大阪大学工学部冶金学科 足立彰教授研究室)を訪れ、受けた衝撃がきっかけでした。(時効成立として、公私混同をお許し下さい。)失礼ながら当時お友達感覚だった大学院生のお兄さん達に、複雑な(ボタンを押すとトラックの荷台が開いて、車が飛び出す)プラモデル作りをお願いするのが目的でした。プラモ取り込み中に父親に呼ばれ、何の気なしに覗いた実験室の皆さんの視線の先には、黄金色に丸く輝く鉄が浮かんでいました。プラモ作りのことなどすっ飛び、色ガラス越しに呆然と見入ってしまいました。小学3年生には“なんでやねん”以上の言葉は出ませんでした。この光景は色褪せないまま、今も脳裏に焼き付いています。レベテーション一発で人生を決めてしまいました。

「俺は金属」という漠然とした思いを秘めたまま10年の歳月が流れ、大学2年生の後半に金属工学科への進学を何の抵抗もなく選択しました。進学当時、金属に興味があって学科を選んだ同期があまり見当たらず、敗北感にも似た後悔の念と少し戦いました。そういう自身の成績も成績でしたが、その点は不問に付させていただきます。以前は、「何故わざわざお父さんと同じ分野に?しかも鉄に?」と直球の質問を頻繁にぶつけられましたが、「子供の頃見た光景が・・・」と美化したような返答をするのも憚られ、「親の書籍も使えるし、

かじれる臍もいろいろあるでしょう」と茶化していました。今更ながらの言い訳ですが、偏差値主義まった中で中高時代を過ごし、「必要最低限のことだけを最大効率で」というモットーの下、世の中を知り、広い視点で学ぶことを先送りしていた(金属以外の分野を知る機会を放棄していた)のは事実です。

最近、多くの大学では広く理工系分野のアウトリーチ活動も行われるなど、中高生にとって将来の判断材料を取捨選択できる環境が整いつつあります。「金属は面白いぞ」、「材料は重要だ」と自画自賛するだけでは魅力を伝えられず、入口、出口双方にスポットライトを当てた地道な啓蒙活動の推進が金属・材料工学の将来にとって重要な鍵の1つになると思います。以前、ある女子高のSSHクラス出張講義に、1.6 kWの電子レンジ持参でお邪魔したことがあります。「お家でやったらあかんよ」と警告した上で実演したマイクロ波製鉄の余興に生徒達の目は爛々と輝き、「面白い」を伝える重要性を実感するよい機会になりました。数日後、「アルミニウムの熔融塩電解をやってみたいのですが」と彼女らの数名が研究室にやって来た時には、嬉しい悲鳴を上げてしまいましたが・・・日本金属学会では、高校生・高専学生のポスター発表が講演大会時に企画されています。教育現場との貴重なインターフェースとして機能しており、発表内容の質疑や評価のみならず、金属・材料工学分野の重要性や大学での学びなどをアピールする好機として参加するよう、自身でも心がけています。しかし、学会活動にはまだまだ多くの導火線が隠れているような気がします。例えば高校生会員の新設や、すでに支部では検討中かも知れませんが、進化したオンラインシステムを活用した高校生対象の講習会・講演会の開催などにより、高校で学ぶ物理学と化学を広く裾野に持つ金属・材料工学が、彼らにはより身近なものになるのではないのでしょうか。また、当該分野を「知る・視野に入れる」チャンス拡大が、先入観による食わず嫌いを抑制し、リケジョ(マテジョ?)増加、ひいては当該分野の教育・研究者の女性比率向上にも繋がるように思います。

ころっと私的なお話に戻してしまいますが、多くの先生方に違わず、小職もかなりの変わり者です。情けなくも、大事

* 東京大学大学院工学系研究科 マテリアル工学専攻; 教授

なところは安易な方向に流されがちですが、論されても直せない妙な価値観を持ち合わせ、家族には迷惑をかけ続けています。九十九里浜のほぼ中央に位置する成東という町(現千葉県山武市)に移り住んで、28年になります。我が国ではちょうどバブルが弾けた頃、ガラス材料学研究室の助手在任期間中に、米国 UCLA に2年間留学する機会をいただきました。ゆとりのあり過ぎた時代で、現在ご活躍される若手の皆様からの激しいプーイングが聞こえます。当時も留学中の執筆論文数を競う声を耳にはしていましたが、「もっと大切なことがあるはず」という根拠の無い大義名分の下、週末は殆ど飛び歩いでいました。(詳述は控えますが、そちらの業績にはかなり自信があります。)帰国後、感覚が相当麻痺しており、「都会では暮らしたくない」という我がまま、「50マイルは通勤圏」という妄想から、「ここぞ終の棲家」と感じた縁もゆかりも無いスポットに家を建ててしまいました。当時現役だった父をはじめ、周囲からは猛反対を浴びましたが、持論でねじ伏せ、家の向きからコンセントの位置まで妥協を許さない図面を米国から持ち帰った Mac で描き、最後は厚紙で作り上げた立体モデルを突き付けて、躊躇う地元の不動産屋さんを説得しました。なお、耐震強度は不明です。

有料特急を使っても片道約2時間の道のりですが、日々の往復を列車内で過ごす時間については、負け惜しみ抜きにかなり貴重なものにしてきました。まだまだ印刷物オンリーの90年代後半までは論文読みや原稿チェックに勤しみ、そのうちパソコン通信に入門。世紀が変わる頃には、車内から携帯電話をアクセスポイントに繋いで、ひたすらラップトップPCの画面に向かっていました。限られた時間の誰にも邪魔されない空間では、最大の集中力が発揮できました。通勤に年間地球一周という奇異なライフスタイルを自己正当化するための意地だったのかも知れません。

少々強引な夢の田舎暮らしを営みつつも、夢見ていたことがもう一つありました。「いつか、自宅の書斎から何でも出来る日が来ればいいな」。これまた、53年前の父の一言に感化されたものでした。小学2年生の図画工作の時間に4名一組の班を作り、模造紙に「未来の社会を描いてみよう」という数週にわたる課題がありました。子供の夢なので、超高層ビルの間を空飛ぶ車が行き交うような素直な画が殆どだったと思います。私もご多分に漏れず事前にそのような下絵を家で考えていたところ、日頃息子の日常など見向きもしない父に「こんなんどうや」と見せられたスケッチが、大きなテレビ画面に映る先生と画面の前で授業を受ける1人の生徒でした。「未来は学校に行かなくても、授業を受けられるようになるんじゃないか」。今考えれば、たまたま父がどこからか仕入れたネタだろうと思いますが、「これは面白い」と、班長の自分が強引に進めました。はっきり言って盗作です。画が下手くそだったためか、残念ながら担任の先生には全く

理解いただけませんでした。その時以来、その画が自身のイメージする未来社会の1枚となりました。そして、還暦を目前に突如訪れたリモート生活。コロナ禍をポジティブに捉えるのは不謹慎ですが、講義から井戸端会議まで、この新たな様式は夢見ていた生活を超越したものでした。昨年4月以降、週の半分以上はサバティカル@九十九里を続けています。人と異なる価値観の意義を確信し、ますます偏屈親父になる今日この頃ですが、当たり前前の価値基準を疑い、独自の重み付けをした価値観を持つと心は悪くないと思います。そして明るく、何事にも前向きに。その姿勢が世を変える研究・開発を芽吹かせるのではないのでしょうか。

歳とともに学会運営に関わる機会も増え、事務局の大変なご苦勞も以前にも増して理解できるようになりました。昨年度はたまたま同時期に、当学会と日本鉄鋼協会双方の副会長を仰せつかることとなり、随所にみられる両学会の違いに考えるとところもありました。もちろん、違いこそがそれぞれの業を示すアイデンティティーではありますが、連携して開催してきた講演大会などでは、共同セッションのみならず、参考にできる点、合理化可能な点など、工夫の余地が残されているように感じられます。ものづくりにおける我が国の国際競争力を維持・強化するために、金属・材料工学分野の基礎研究・技術開発のさらなる活性化が望まれる中、会員数減少とは裏腹に、知の協創・産学連携のプラットフォームとして、そして人材育成の場としての学会の使命は、一層重要になります。甚だ微力ですが、当該分野の繁栄と主役を担う後進のために、残された時間を捧げたいと思います。できるだけリモートで……。

取り留めのない関西人の駄文に最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。会報との年齢関係は変わり得ませんので、70巻記念企画には「古希会員からのお便り」が無いことを信じて、来る10年間の皆様方のさらなるご活躍ご発展を祈念し、結びとさせていただきます。

最後になりましたが、道しるべを照らしてくれた亡き父に思いを馳せ、お導き下さった恩師や先進の皆様、そして何よりも、自身と研究室を支えてくれた多くの卒業生・学生の皆様に感謝の意を表します。



森田一樹

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★
1988年3月 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了

1988年4月 東京大学工学部助手

1993年1月 同講師

1995年11月 同大学院工学系研究科助教授

2006年1月 同生産技術研究所教授

2013年1月- 現職

専門分野: 材料製造・循環工学

◎鉄鋼製錬や太陽電池用シリコンの精製プロセス、リサイクルプロセス開発に関連する熱力学研究や高温物性測定を中心に、高温の物理化学研究に従事。

★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

(2021年9月27日受理)[doi:10.2320/materia.60.734]